

https://farid.ps/articles/dissolution_of_the_ego/ja.html

エゴと機械：資本主義が聖なるもの把自己に置き換えた方法

人類はかつて、広大で神秘的なもの—宇宙、地球、神聖なもの、生命の永遠のリズム—の一部として自身を理解していました。すべての文化には同じことを言う独自の方法がありました：意味は所有することではなく、参加することにあり、蓄積することではなく、つながりにあります。

しかし、過去数世紀、特に資本主義と産業近代の台頭とともに、その羅針盤は逆転しました。かつて聖なるものが人間の生活を導いていた場所に、**自己**が王座に就きました。エゴを超えるという古の探求—超越への探求—は、エゴの満足を追い求める終わりのない追求に取って代わられました。

神話の死が残した真空の中で、**消費主義が新たな宗教**となり、市場はその神殿となりました。人類は内なる解放を物質的豊かさと交換し、そうすることで奇妙にも空虚な自分を見つけました。

先住および古代の信仰：円の中で生きる

現代経済の台頭よりずっと前、先住および古代の社会は、自己と世界の境界を溶かす宇宙論に従って生きていました。これらの文化では、人生は所有物ではなく、土地、動物、目に見えないものとの相互的な絆の織物である関係でした。

生命の網

多くのアメリカ先住民族の間では、世界は**相互につながれた網**—「大いなる円」や「聖なる輪」—として理解され、そこで人間は動物、植物、川、星と親族でした。ラコタのフレーズ **Mitákuye Oyás’iŋ**—「すべての私の親族」—は、生態学がそれを反響させる何世紀も前に、**相互存在**の形而上学を表現しています。

この世界観では、自己は孤立した意識ではなく、生きたネットワークの結び目です。個人のアイデンティティは関係的であり、コミュニティ、祖先、そして風景そのものによって形作られます。全体への敬意なく行動することは、自己を傷つけることです。したがって、精神的な成熟とは、分離の幻想を溶かし、人間を超えた世界の中で謙虚に生きることでした。

儀式、供物、季節ごとの儀式は単なる迷信ではなく、**バランスの行為**—人生が円環で流れ、与えることが受け取ることを支えるという認識でした。猟師は鹿の精霊に感謝し、農夫は雨に祈り、語り部は祖先を呼び出しました。すべての生命は聖なる交換に参加していました。

古代文明と聖なる宇宙

古代エジプト、インド、ギリシャ、メゾアメリカでは、同様のテーマが現れます。宇宙は不活性な物質ではなく、**魂を持つもの**—神聖な知性によって活気づけられたものでした。エジプトの**Ma’at**（真実、バランス、宇宙の秩序）やギリシャの**kosmos**は、すべての存在がその位置を持つ調和のとれた全体を指します。

人類の役割は自然を支配することではなく、**その調和を反映すること**でした。神殿は宇宙の象徴的な複製として建てられ、司祭団は世界の間の仲介者として機能しました。人類がその宇宙的役割を忘れたとき—エゴと貪欲が**Ma’at**を乱したとき—無秩序が続きました：飢饉、戦争、道徳的衰退。

道教：存在の流れ

古代中国では、**道教**がこれらの直観を哲学的に洗練させました。**Tao Te Ching**は、道（Tao）がすべての存在の源でありリズムであると教えています。賢者は**wu wei**—努力のない行動—を通じてエゴを溶かし、人生が彼らを通じて生きることを許します。

「最高の善は水のようだ」と老子は書いています。「それはすべてのものに利益をもたらし、競わない。」道に逆らって生きること—努力し、強制し、支配すること—は苦しみを意味します。道に戻ることは、丘を流れ下る水のようになること、形作られながらも壊れないことです。

ここでも、エゴの溶解は消滅ではなく、**調和**一個人的な流れが宇宙の川と不可分であるという再発見です。

共有の知恵

これらの多様な伝統—先住、エジプト、道教—を通じて、同じ洞察が輝きます：意味、理性、生存は、**我々が全体に属していることを思い出すことに依存**しています。自己は、はるかに大きなものの暫定的な表現であり、偉大な火の中の火花です。

これを忘れることは原罪一分離への転落です。それを思い出すことは、救いであり、言葉が信仰を意味するずっと前からです。

現代の宗教：分離した自己の死

人類の哲学が進化し、正式な宗教が興ると、同じ神秘的な糸が新たな言語や神話的形式で表現されながらも現れ続けました。

佛教：無我の静寂

佛教では、**anattā**—「無我」の教え—は、持続的で独立した「我」という幻想を解体します。私たちが自己と考えるものは、感覚、知覚、思考、意識の流れです。この幻想が溶けると解放が生じます。執着の終わりは涅槃であり、欲望、嫌悪、無知のエゴの炎の消滅です。

佛教の修行者は、自己の境界を緩めるために、マインドフルネスと慈悲を鍛えます。私たちの思考や感情が一時的であると見ると、もはやそれらと同一視しません。残るのは意識そのもの

一輝く、中心のない、自由なものです。

ブッダは私たちに、より良い自己になる方法を教えませんでした。彼は私たちに**自己からの自由**を教えました。

ヒンドゥー教：内なる無限

ヒンドゥー哲学、特にアドヴァイタ・ヴェーダンタでは、エゴは無知（*avidyā*）のベールです。その下にはĀtman、真の自己があり、それは個人的ではなく、Brahman—存在の無限の基盤—と同一です。

有名なウパニシャッドのフレーズ**Tat Tvam Asi**—「汝はそれなり」—は、個のエッセンスが宇宙のエッセンスと同じであると宣言します。解放（*moksha*）への道は、個性の完全化ではなく、その超越です。

波が自分が水であると気づくとき、存在の海が現れます。エゴは無に溶けるのではなく、無限に溶けます。

イスラムとスーフィズム：愛する者への消滅

イスラムでは、究極の真理は**tawhīd**—神の一体性におけるすべての存在の統一—です。イスラムの神秘主義者、**スーフィー**は、この教義を生きた体験に変えました。記憶（*dhikr*）と愛を通じて、探求者のエゴは愛する者の輝きに溶け、ただ神のみが残ります。

飛行するスーフィーの物語はこの真理を体現しています。深い献身を通じてダルヴィーシュは飛ぶことを学びます。しかし、舞い上がる中、彼の心に一つの考えがよぎります：「私が飛べると聞いたとき、家族は何と思うだろう？」と。彼は即座に地に落ちます。彼の師は言います：「お前はよく飛んでいたが、振り返った。」自己意識が戻る瞬間、恩寵は消えます。

スーフィズムでは、これを**fanā**—神への自己の消滅—と呼びます。しかし、この消滅には**baqā**—神における存続—が続きます。エゴは死に、残るのは純粋な存在です。

ユダヤ教：自己の無効化

カバラ的ユダヤ教では、神秘主義者は**bittul ha-yesh**—エゴの「何か」の無効化—を求め、**Ein Sof**、無限に遭遇します。**tzaddik**または義人は、完全に自己を空にし、神聖な光が障害なく彼らを通って流れる者です。

この神秘的な言語では、謙虚さは控えめさではなく、**存在論的真理**です：真に「ある」のは神のみです。エゴが溶けるほど、神聖なものは世界でより見えるようになります。

キリスト教：空虚と内在

キリスト教の神秘主義は、**kenosis**—自己の空虚—という概念で独自のバージョンを提供します。聖パウロは書きました：「我生きる、されど我にあらず、キリスト我に生きる。」マイスター

ー・エックハルトにとって、魂は「自己を空にしなければならない」ので、神がその中に生まれることができます。

瞑想的なキリスト教—砂漠の父たち、知られざる雲、カーメル派の神秘主義者の系譜—では、祈りは物を求めることではなく、エゴが静まり、神聖な存在がすべてとなる静寂に入ります。

ウィッカとペイガニズム：聖なる円の再獲得

現代のウィッカと現代のペイガニズムは、しばしば「新しい」宗教として却下されますが、神聖さが世界の中にあり、その上や彼方にはないという古代の記憶を保持しています。

女神の指令、 ウィッカの中心的なテキストの一つで、女神は宣言します：

「すべての愛と喜びの行為は私の儀式です。」

ここでは、神聖さは世界から逃げることではなく、それを完全に敬意を持って受け入れることによって見つけられます。エゴはエクスタシーと具現化を通じて溶け、禁欲主義を通じてではありません。

儀式の円は存在の全体を表します—ヒエラルキーなし、分離なし。最高女祭司が「レディ」や「ロード」を呼び出すとき、それは外的な神が降臨するのではなく、すべての参加者の中に、そしてその間に神聖が目覚めることです。

季節の祭り一年の車輪—は、死と再生、暗闇と光が一つの連続した脈動であることを教えます。実践者は、自分を自然の主人ではなく、その表現として見ることを学びます。エクスタティックなダンスで、トランスで、地球と空との交わりで、自己の境界は薄くなり、こう感じます：私は呼吸する森です；私は水に映る月です。

ウィッカの超越への道は、したがって、垂直ではなく内在的です。エゴは天へと溶けるのではなく、地球の生きた網へと外に溶けます。

心理学：マズローと超越の科学

20世紀に、心理学は神秘主義者が常に知っていたことを再発見し始めました。アブラハム・マズローの欲求階層は、人間の動機を説明するために象徴的になりました—基本的な生存から愛と尊敬まで、**自己実現**で頂点に達します。

しかし、晩年に、マズローはモデルを改訂しました。自己実現を超えて、彼は別の段階を認識しました：**自己超越**。ここでは、自己の境界が溶けます。人は、奉仕、創造性、自然、または神秘的合一など、より大きなものに参加します。

現代の神経科学はこれを反響します。人々が深い瞑想、エクスタティックな祈り、またはフロー状態に入ると、デフォルトモードネットワーク—私たちの自己感覚を維持する脳の部分—が静まります。主観的な相関は、エゴの溶解であり、平和、慈悲、統一が伴います。

マズロー、ブッダ、スーアーがそれぞれの言語で観察したのは、**人間の最高の可能性は自己の完全化ではなく、その超越にある**ということです。

資本主義：エゴの偶像崇拜

それでも、現代世界を支配する文明は、反対の前提に基づいています：自己は溶けるべきではなく、無限に**拡大**されるべきです。

資本主義は、その心理的本質において、エゴの飢えに依存しています。それは、精神的な憧れを消費可能な欲望に変えることで繁栄します—私たちに、内の空虚が所有物、力、地位、刺激で満たせると確信させることで。

広告は製品を売るのではなく、**欲望を製造**します。それは私たちに言います：**あなたは不完全だ—しかしこれがあなたを完全にする。** それは物を通じて救いを売ります。

パラドックスは悲劇的です：古代の知恵が超越を通じて癒そうとしたエゴの不満は、**経済のエンジン**になりました。空虚はもはや精神的な問題ではなく、ビジネスモデルです。

したがって、かつて苦しみの根源と見なされていたもの—欲望、執着、誇り—は美德として再ブランド化されました：野心、生産性、達成。合一や静寂を求めることは、この世界観では非生産的—危険でさえあり、欲望の機械を脅かすからです。

資本主義のマントラは「**静かにして知れ**」ではなく、「**より大きく、より良く、より速く、より多く。**」です。それでも、自己を養えば養うほど、それはより飢えます。ショッピングモールやデジタルフィードは、この落ち着かない神—**エゴの偶像**—の聖堂であり、終わりなく消費し、真に満足するものを何も生み出しません。

結論：聖なるものの帰還

現代の危機は経済的または生態的なものだけでなく、**精神的**です。エゴを中心に組織された文明は自らを維持できません、なぜならエゴは限界を知らないからです。それは地球を、互いを、そして最終的には自身を貪り食います。

しかし、私たちの周りには目覚めの兆しがあります：瞑想、コミュニティ、生態学的意識、新しい連帯の形に目を向ける人々。科学もまた、賢者がずっと前に宣言したことを認め始めています一心、惑星、魂の健康は切り離せないということです。

エゴを溶かすことは自己を失うことではなく、**家に帰ること**—決して失われなかった、ただ忘れられていた合一を再発見することです。

次の革命は武器やアルゴリズムで戦われるのではなく、意識で戦われます。人類が**私たちは世界の主人ではなく、その瞬間であることを思い出すとき、聖なるものは再び目覚めます**—神殿や教義ではなく、意識、慈悲、単純さのすべての行為において。

参考文献とさらなる読書

古代および先住の思想

- ブラック・エルク, **Black Elk Speaks** (John G. Neihardt, 1932)
- ヴァイン・デロリア・ジュニア, **God Is Red: A Native View of Religion** (1973)
- 老子, **Tao Te Ching**, 翻訳 D.C. Lau (Penguin Classics, 1963)
- フリッチョフ・カプラ, **The Tao of Physics** (1975)

神秘主義と世界の宗教

- アルダス・ハクスリー, **The Perennial Philosophy** (1945)
- 鈴木大拙, **Essays in Zen Buddhism** (1927)
- スワミ・ヴィヴェカナンダ, **Jnana Yoga** (1899)
- アンネマリー・シンメル, **Mystical Dimensions of Islam** (1975)
- ゲルショム・ショーレム, **Major Trends in Jewish Mysticism** (1941)
- マイスター・エックハルト, **Selected Writings** (Penguin Classics, 1994)

ウィッカと新異教

- ドリーン・ヴァリエンテ, **The Charge of the Goddess** (1957)
- スターホーク, **The Spiral Dance** (1979)
- ロナルド・ハットン, **The Triumph of the Moon: A History of Modern Pagan Witchcraft** (1999)

心理学と自己

- アブラハム・マズロー, **The Farther Reaches of Human Nature** (1971)
- ミハイ・チクセントミハイ, **Flow: The Psychology of Optimal Experience** (1990)
- ウィリアム・ジェームズ, **The Varieties of Religious Experience** (1902)
- スタニスラフ・グロフ, **Psychology of the Future** (2000)

文化と資本主義

- エーリッヒ・フロム, **To Have or To Be?** (1976)
- クリストファー・ラッシュ, **The Culture of Narcissism** (1979)
- ナオミ・クライン, **No Logo** (1999)
- チャールズ・アイゼンスタイン, **The More Beautiful World Our Hearts Know Is Possible** (2013)